HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	リチャード・シドル著、マーク・ウィンチェスター訳『アイヌ通史：「蝦夷」から先住民族へ』岩波書店、2021年
Author(s)	坂田, 美奈子
Citation	アイヌ・先住民研究, 2, 237-245
Issue Date	2022-03-01
DOI	10.14943/Jais.2.237
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/84534
Type	bulletin (article)
File Information	09_2_Sakata.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

アイヌ・先住民研究　第２号　2022　p.237–245　ISSN 2436-1763
Aynu teetawanoankur kanpinuye (2) 2022　p.237–245　DOI 10.14943/Jais.2.237

【書評】

リチャード・シドル著、マーク・ウィンチェスター訳『アイヌ通史：「蝦夷」から先住民族へ』岩波書店、2021年

Richard Siddle. *Race, Resistance and the Ainu of Japan*. Translated by Mark Winchester. Tokyo: Iwanami Shoten, 2021

坂　田　美奈子*
Minako SAKATA

はじめに

本書は Richard Siddle, *Race, Resistance and the Ainu of Japan*（1996 年）の翻訳である。日本語版には補章として、原書出版後に制定されたアイヌ文化振興法（1997 年）に関する論文（2002 年）も加えられている。訳者のマーク・ウィンチェスターは、シドルの指導のもと研究を開始したアイヌ近現代思想史研究者である。訳者解題ではアイヌ施策推進法（2019 年）下の今日の状況に照らして本書の意義を論じている。

本書は近現代におけるアイヌのアイデンティティ形成史を和人のイデオロギー形成史との相関関係において記述したものである。その前史として第二章に近代以前の日本における蝦夷認識、アイヌ - 和人関係の歴史もまとめられているが、主要な関心は明治から 1990 年代に至るまでのアイヌ - 和人関係史であり、特に 20 世紀前半以降のアイヌのアイデンティティ形成過程が中心的位置を占める。

原題に示されているとおり、本書を通じて「人種（race）」が中心的な分析概念として用いられ、近代以降、和人がアイヌを差異化するイデオロギーの形成過程は、アイヌの「人種化」プロセスとして論じられる。これに対し、アイヌの動向を分析するために用いられるのは「想像の共同体」としての「民族（nation）」概念である。近世まで分散的な地域集団として存在していたアイヌが、明治以降「劣等人種」として蔑視され差別に晒される共通の経験を通して「想像の共同体」としての「民族」として自覚を強め、戦後には海外の先住民族との交流を通して「先住民族」として成長していく、というのが本書の提示するアイヌ史観である。なお、本書における「人種」「民族」は

*　北洋大学国際文化学部

いずれも構築主義的な概念である。

1990 年代後半という時点で、アイヌ近現代史を単なる被抑圧の歴史ではなく、アイデンティティの創造的再構築の過程として記述した点に先駆性があり、本書はその後の英語圏のアイヌ研究において必須の参照文献のひとつとなっている。一方、この間、日本のアイヌ史研究は本書のインパクトをほとんど受けてこなかった。そのために 25 年前の著作ながら、本書には今なお、というより今だからこそ日本で読まれるべき意義が数多くある。本稿では、今、本書を読む意義について複数の観点から述べたい。

1　「開拓」とcolonization：日本と英語圏における「常識」のギャップ

日本におけるシドルの知名度が、ディヴィッド・ハウエルやテッサ・モーリス＝鈴木に比し高いと言えないのは、これまで日本語訳がなかったこと、日本におけるアイヌ史・北海道史の関心および研究者層が近代以前の時代に偏っているという状況があるだろう。1990 年代までも視野に収める同時代史的分野は、日本のアイヌ史研究において学術分野としてはほとんど成立していない。

2000 年代以降、英語圏と日本の北海道史・アイヌ史研究の間にはかなりの「常識」のギャップが出来てしまったように思われる。本書でシドルが指摘しているように 1980 年代、英語圏の日本近代史研究の大家であるマーク・ピーティは北海道を近代日本帝国の植民地から除外していた。しかし今日、英語圏で北海道・アイヌは当然のように植民地研究のテーマとして扱われている（例えば Mason2012、Ziomek2019）。日本で「開拓」「内地化」などといった北海道史独特の用語で表現される現象は colonization（植民地化）と記述されている。このような事態に関連して妙な現象も起こっている。日本近代行刑史をまとめたダニエル･ボツマン『血塗られた慈悲､笞打つ帝国』では、明治期､北海道に導入された囚人労働を論じるなかで colonization（植民地化）と記述された箇所が、日本語訳ではなぜか省略されたり「開拓」と翻訳されたりしている（Botsman 2005:179, 188、ボツマン 2009：256、265）。

以上のような乖離を生んだ背景に、日本におけるアイヌ近現代史分野の停滞、日本の北海道史・アイヌ史研究が「日本語の言説空間」であること、そして何より、日本の社会、北海道の社会が未だに脱植民地化できていないことがある。脱植民地化のためには、まず植民地化の歴史を認識することが前提となるが、日本近代史研究においては一般に、台湾が「最初の植民地」と認識され、北海道、小笠原諸島、沖縄の編入は近代日本の国境画定過程と認識されてきた。これに対し日本国家にとっての国境画定は、編入された地域にとっての植民地化であるという議論が行われるようになったのは比較的最近のことである（例えば波平 2014、塩出 2014、同 2015、坂田 2018）。日本で本書の影響がほとんどなかったことは不幸のひとつではあるが、1990 年代後半の時点で、我が国に本書の内容を受け止める準備が整っていたともいえない。

とはいえアイヌ史研究に関していえば、北海道を「植民地」と呼ぶ傾向ははるか以前からあった。しかし植民地という言葉が無限定に使用され、植民地状況を単なる差別問題として、もしくは差別問題を植民地のような状況として比喩的に論じる傾向は、かえって植民地問題と本国国内の差別問題との違いを曖昧にしてしまう。日本のアイヌ史研究には、人種の理論的概念化が欠如しており、人種的説明が受け入れられた歴史的社会的文脈が考慮されていないために、アイヌ問題を植民地接触の問題として十分に論じることができなかった、とシドルが指摘したのは、このような傾向を指してのことだろう（シドル 2021：2-3）。

アイヌ史を植民地史として論じることが重要なのは、それが先住民の存在の承認と密接な関係にあるためである。先住民という存在を生み出したのは移住植民地（settler colony）政策である[1]。先住民の土地に本国から移民を送って植民地を建設し、独立国を建国するか本国に併合した側にとって、その土地は「本土」に他ならない。一方、それは先住民にとっては父祖伝来の土地の植民地化に他ならない。一つの空間が、本土でありかつ植民地として同期して続けている状況が移住植民地／先住民問題である。先住民側が一貫して自分たちの経験を植民地問題として論じる一方、国家とセトラー社会が移住植民地を「植民地ではない」と認識するのは、移住植民地の突出した特徴のひとつである[2]。

シドルは「日本語版への序文」のなかで、1990 年代にアイヌ研究を開始したとき、アイヌは「先住民族」ではない、「北海道は植民地空間ではない」といった多くの（日本人からの）反論に遭遇した経験を回想している（シドル 2018：ix）。30 年後の現在、残念ながら状況はそれほど大きく変化したようには見えない。アイヌ施策推進法（2019 年）によって、「先住民族」であることが法律に明記されたことはもちろん前進ではある。しかし、政府は「先住民族」の定義を行わないと明言し[3]、海外の先住民とアイヌの状況は歴史的にも現状の上でも「異なる」として「先住権」を認めることには後ろ向きである。

Indigenous peoples の訳語ではない「先住民族」という言葉自体は、戦前からアイヌを指して使用されていた。内閣官房 HP 英語版の「アイヌ施策推進法」の説明では、確かにアイヌを an indigenous people と述べているが、日本国内でその意味が説明されない状況においては、海外でアイヌが「父祖の地を植民地化された」先住民（an indigenous people）であるとの認識が定着する一方、日本国内では旧来の単なる「先住民族／（漠然と）昔からいた人々」という認識のままという状況が継続する。

1　これに対し日本で通常、植民地と認識されているのは従属植民地（dependent colony）とよばれるタイプの植民地である。

2　セトラーは単なる移民（migrants）を指すのではなく、移住した先で政治秩序を形成し、主権をとる者たちを指す（Veracini 2010：3）。

3　「第198回国会衆議院国土交通委員会議録」第五号、2019年4月10日、14頁。

2　セトラーコロニアリズム研究的な視角

本書の先駆性はアイヌ史を植民地接触という視角から論じた点だけでなく、2000 年代から英語圏で活発化するセトラーコロニアリズム研究的な関心を随所にみせている点にもある。1990 年代には欧米においても、植民地研究は主に従属植民地（外部権力による現地人支配）研究に偏り、一方で移住植民地は植民地ではないと認識されてもいた（Veracini 2010: 4）。セトラーコロニアリズム研究が植民地研究として独自の地位を築く画期となったのは Patrick Wolf（1999）で、Wolf は従属植民地におけるコロニアリズムとは異なるセトラーコロニアリズムの特徴を①現地人の労働搾取ではなく、現地人の土地を奪うものであること、したがって②先住民の存在は不要となり、イデオロギー支配の比重が労働搾取型植民地よりも大きい、と述べている（同上：1-3）。

シドルは北海道において搾取の対象となった主要資源は土地であると指摘し（シドル 2021：15、68-69）、アイヌ支配を可能にしたイデオロギーに主要な関心を向けている。シドルはそのイデオロギーの一貫性のなさをグラムシの「常識」概念を通して説明しているが（シドル 2021：6）、「常識」の概念は近年のセトラーコロニアリズム研究でも重要なテーマのひとつとなっている。Rifkin（2014：xvi）は、セトラーによる先住民の土地へのアクセスを可能にする法的・政治的構造が無自覚に当然のこととして生きられる移住植民地のしきたりを「セトラー的常識（settler common sense）」という言葉で表している。セトラーのイデオロギーは社会のあらゆる日常に織り込まれ「常識」と化し、そこにある矛盾は意識されることも疑問を付されることもない。

このようにセトラーコロニアリズム研究の特徴は、植民地主義を持続させる主体が、国家権力だけでなく、「セトラー的常識」を身体化した一般のセトラーでもあると認識し、社会全体の責任を問い、引き受ける点にもある。Lawman and Barker（2015: chap.2, chap. 3）が提示するカナダにおけるセトラーの自己正当化言説の特徴は、驚くほど北海道にもあてはまる。本土との関係において被害者意識が高く、無主地へ入植したのであって誰の土地も奪ってはいないという意識がある。一方で先住民が初期入植者を助けた記憶は忘却される。カナダにはアメリカと違って植民地主義の歴史はないという歴史認識／神話が流布し、一般に外来者に対し寛容な土地柄という自己イメージがある、など。先住民との関係で起こった過去の暴力・抑圧は、このようなセトラー社会の自己認識によって上書きされている。

シドルは、アイヌを人種化して貶めるイデオロギーが、いかに大衆レベルの「常識」と化し、「普通の人々」がアイヌに対する生身の暴力の主体となったか、を指摘する（シドル 2021：140-149）。これに対し日本の北海道近代史における「民衆」は、国家権力との関係で「被害者」「抵抗者」として表象される。アイヌ史の批判的検証の対象は主に国家権力である。普通の人々によるアイヌへの抑圧は「差別」の具体的エピソードとしてしばしば挿入されるにとどまり、その限りで暴力的な個人の言動以上の位置づけがなく、構造化の視点を欠いている。しかし例えば戸塚美波子（2003：

88-89）が述べる、アイヌがジロジロ見られ、「アイヌ」と罵られ、日常的に「緊張」を強いられる状況は、意識の低い個人の問題行動に留まる問題ではなく、まさに「人種化」という「セトラー的常識」にアイヌが包囲されていることを示しているのではないだろうか。

今日なお日本では、移住者社会の歴史的社会的責任に向き合う議論はほとんどみられない。現在、アイヌの置かれた状況を考える時、一般社会の理解・認識の欠如が足かせになっていることが少なくない。消極的な形で現在なお、和人セトラーはアイヌに大きな影響を及ぼす主体であり続けている。現実の社会問題に向き合うという点では、セトラーコロニアリズム研究はセトラー側研究者によって担われることに本来意味がある。和人研究者が自らこの分野に取り組むことが今後の課題である。

3　コミュニティ形成史としてのアイヌ近現代史

本書の歴史叙述としての最も傑出した特徴はアイヌ近現代史をアイヌのコミュニティ形成史として描いた点であろう。しかも、アイヌ社会そのものが孕み続ける矛盾や課題を指摘することも忘れない、均整の取れた説得力ある叙述になっている。

北海道の移住植民地化により土地・資源を失い、旧来のアイヌの地域社会は衰退・崩壊してゆく。なおかつ人種論と社会進化論の影響下で蔑視や偏見に満ちた表象・イメージに晒されるという共通の経験をとおして、地域を超えた「アイヌ」というアイデンティティが自覚されるようになり、1920 ～ 30 年代には比較的裕福なアイヌを中心に連帯を模索する運動が現れる。戦後には、日本帝国の崩壊に伴い「単一民族国家」論が流布するなか、アイヌは一方で人種化され差別される存在でありながら、一方で独自のアイデンティティを持つことも否定されるというダブルバインド状況におかれる。1946 年に結成され、1961 年に再建された北海道ウタリ協会（以下、ウタリ協会）は比較的裕福なアイヌ・エリートからなり、道庁の予算や指導をうけつつ、アイヌの生活改善に取り組む福祉団体として活動を続けていた。しかし 1970 年代以降、アイヌ独自の文化や歴史を再認識し、海外の先住民運動に刺激をうけた若いアイヌの活動家の動きが活発化すると、その影響を受ける形で 1980 年代にはウタリ協会そのものが歴史・文化を紐帯とするアイヌ民族として集団的利益を求める新法案を起草するに至る。これをもってシドルはアイヌが「滅びゆく民族」から先住民族となった、と述べる（シドル 2021：248）。

一方で、シドルはウタリ協会が中心となった運動がはらむパラドクスも指摘している。ウタリ協会の強みでもあり弱みでもある行政・政府との密接な関係、先住民の運動が道庁から資金を提供され、キャリア官僚の指導の下で行われているという事実、ウタリ協会に批判的なアイヌやアイヌ文化活動に関心のないアイヌなどは周縁化されていること、このような傾向はアイヌ文化振興法以降、一層強化されていること、などである。想像の共同体としての「アイヌ民族」が未だに脆く「壊れ

やすいままである」という指摘は（シドル 2021：253）、これが 25 年前に書かれたとは思えないほど、現在にも当てはまる。

シドルはアイヌ民族に対し、Ainu nation という英語を充てている。Nation は国家、国民ないし政治共同体としての民族を指す。単なる文化共同体としてのエスニック・グループではなく、政治共同体としてアイヌが成長していった歴史をシドルは記述したのである。上記に指摘したような課題を踏まえつつも、アイヌ近現代史をアイヌのコミュニティ形成史として認識する歴史観は、今日の日本において、本書が書かれた 1990 年代後半には持ち得なかった含意を持つ。現在のアイヌ政策は、アイヌには権利主体としてのコミュニティはもはや存在していないという前提の上に設計されているのだ（常本 2011：44-46、同 2016：88-90）。訳者解題でウィンチェスターが指摘するように、近年、アイヌを取り巻く政治・社会は右傾化傾向にあり、その中で「個人としてのアイヌ」が政策の対象となっていった。この状況をシドルの歴史観を通してみると、アイヌが 20 世紀を通じて再創造したコミュニュティを、日本の政治と社会が再否定している構図が浮上する。

国民も民族も歴史的な構築物であるという点は、今日、人文社会学分野では広く了解されている。近代日本国家もまた、260 の藩からなる近世国家から近代国民国家へと自己変革を行う過程で、紐帯としての近代天皇制を発明した。同様に、アイヌもコタン単位の地方分散型社会から地域を超えた共同体としての「アイヌ民族」へと変貌を遂げたのである。和人の歴史に構築主義が適用され、アイヌに本質主義（伝統的コミュニティが存在しなければコミュニティは存在しない）が押し付けられるとすれば、シドルのいう「人種化」は現在なお生きた問題であり続けていることになる。

4　「人種化」と「同化」のパラドクスについて

シドルは本書において、日本近現代におけるアイヌ蔑視が、人種論と社会進化論に基づく「人種化」イデオロギーに由来し、そのイデオロギーが社会の隅々にまで「常識」として浸透し、構造化されていった流れを記述した。滑らかに歴史が記述されるために、見落としそうになるが、シドルも指摘しているように、日本におけるアイヌに関する「人種論」には、西洋的「人種論」と真逆の発想である「混血による同化論」が含まれている（シドル 2021：124-128）。西洋的人種論において白人には純血性が求められ、混血はすべて非白人のカテゴリーとなる（Hodes 2006）。非白人が白人へ融合するとは考えられない。

「混血による同化論」とアイヌの「人種化」との関係を、シドルは説明しきれていないようにみえる。道庁が混血を通じた同化を推奨する一方、一般社会においては人種化された差別・排除が常識化していた、と対照的に論じ、イデオロギーと現実の矛盾として処理しているようにみえる（シドル 2021：146-149）。この点について、1990 年代末以降進展した研究を参照しつつ、シドルの議論を補足したい。

江戸後期に西洋から伝わった人種概念は、明治期以降、日本で独自の発達を遂げた。西洋の人種論が人類多元説に基づき、人種ごとの能力差は遺伝的に決定されていると考えたのに対し、自らが有色人種である日本人にとって差別的人種論は受け入れがたく、一つの先祖から複数の人種が派生したと考える人類一元説が 1890 年代に普及した。これは一種の人種平等説でもあった（小熊 1998：58-59、與那覇 2003）。一方で、同じ人種内で歴史・言語・文化を異にする集団を差異化・序列化するため、人種の下位区分として「民族」という独自概念が発明され、1880 年代末以降普及する（民族は西洋語の翻訳語ではない）（山室 2001：第 1 部第 5 章）。加えて優秀な人種・民族と劣等な人種・民族が混血した場合には優秀な方が生き残るという日本独特の「優生学」も主張された（山室 2001：57-63、坂野 2005：209-210）。人類一元論は人種・民族間の混血による融合を可能とし、日本独自の「優生学」は融合・同化の末に「劣等な人種・民族」が消滅することを説明した。以上のように「日本独自の人種論」「混血による同化論」「アイヌ滅亡論」は相互に矛盾しない。従って、アイヌに押し付けられたのは、人種化＝異化と同化という背反するイデオロギーというよりは、「異化・同化・滅亡」の単線的な過程だったといえる。

人種化と同化の圧力に晒されたアイヌの経験は、上記のような日本固有のイデオロギーからだけでなく、セトラーコロニアリズムの文脈において理解することも可能である。近年、植民地における搾取関係の違いによって、人種間の混血に関し対照的な原理が働いていたことが指摘されている。例えば、20 世紀初頭アメリカにおける One Drop Rule では、一滴でも黒人の血が入っていれば黒人とみなした。しかし 19 世紀末のオーストラリアでは混血のアボリジニはアボリジニではないことが法制化された（Smith et al. 2011：19-20）。労働収奪を目的とする黒人の場合、混血によって人口が増加するのに対し、土地収奪を目的とした先住民の場合、混血によって人口は減少すると考えられたのである。

従属植民地や労働搾取を目的とした人種間関係において、白人と非白人の混血は非白人とされる。非白人が労働搾取の対象であり、その人口維持・増加は労働力の維持・増加に他ならない点で、この考え方には経済合理性もある。一方、移住植民地においては白人が必要とするのは土地であり、先住民は不要な存在である。したがって、先住民の数は減少することが望ましく、混血を先住民と数えないことに合理性がある（Wolfe1999:1-2、25-34）。混血によって先住民は白人になることはないが、先住民でもなくなり、先住民人口は減少して滅亡に至るとする言説は、移住植民地において普遍的にみられた。日本の同化主義は、混血によって先住民が支配民族に同化すると考えた点に独自性はあるが、それによってアイヌが消滅すると考えた点は西洋の移住植民地と共通する。

このように考えると、アイヌと和人の混血が「混血アイヌ」と呼ばれ、「混血和人」とは呼ばれないという現象は、シドルの指摘するように、アイヌが「人種化」され、同化し得ない存在とみなされたというよりは、日本の人種論的には同化しきっていないことに対する名指しであり、セトラーコロニアリズム的には「純粋」ではないことに対する名指しと考えられるのではないだろうか。い

ずれもアイヌとして存在することに対する否定ないし非難の言辞である。「混血アイヌ」という呼び名のヴァリエーションに、通俗的にしばしば聞かれる「純粋なアイヌはもういない」という言説がある。これらは、純粋ではないアイヌはアイヌではない、混血アイヌは和人ではないが、アイヌでもない。つまりアイヌはもはや存在しない、という含意を持つスピーチアクトなのではないだろうか。アイヌを「純粋」なものに限定し、目の前の存在をアイヌと認定しなければ、和人はアイヌ問題から解放され、北海道の移住植民地状況も解消されるのである。このような名指しや言説が、一般社会で何気なく発せられ流通してきた環境こそがまさにセトラーコロニアリズムなのである。

おわりに

本書の中心にある人種概念やイデオロギーに関する議論は、1990 年代後半から 2000 年代にかけて日本においても活発に研究が行われたこともあり、今日では定着した議論といってよい。しかし本書が今、日本語に翻訳される意味を考えた時、本書をアイヌ史の伝統的鋳型である「支配と抵抗」の議論として読むに留まるならば、ウィンチェスターが指摘するとおり、それはあたっていない（シドル 2021：350-355）。本書で記述されたのは、抑圧の反作用としての抵抗ではなく、被抑圧の経験に蓋をする主体的歴史でもなく、差別と蔑視のただ中で近現代アイヌが構築した歴史である。

さらに、「常識」概念を用いて和人の一般大衆の責任に言及している点、アイヌのコミュニティの歴史を、地域共同体から地域を超えた政治共同体（nation）への成長としてとらえるという歴史観は、今日の和人社会が未だに向き合えてすらいない問題を指摘している。1990 年代にシドルが見出した、再創造されるアイヌのアイデンティティと共同体が、現在にいたっても和人の目には入らないということそのものが、和人に突き付けられた課題である。

本書はアイヌ・アイデンティティを持つ人々にも問いかけている。20 世紀におけるアイヌのアイデンティティとコミュニティ再生の試行錯誤を、シドルは「想像の共同体」、政治共同体としてのアイヌ民族の形成として記述した。20 世紀末の時点で、この「想像の共同体」に参加していないアイヌの存在もシドルは認識している。壊れやすい、成長過程の共同体をシドルは記述した。このような歴史観にアイヌは今後どのように応答するのだろうか。本書には和人もアイヌもそれぞれが今後成長するために深めるべき論点がふんだんに詰まっている。

参考文献

小熊英二（1998）『〈日本人〉の境界：沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮　植民地支配から復帰運動まで』東京：新曜社
坂田美奈子（2018）『先住民アイヌはどんな歴史を歩んできたか』東京：清水書院
坂野徹（2005）『帝国日本と人類学者一八八四－一九五二年』東京：勁草書房

塩出浩之（2014）「北海道・沖縄・小笠原諸島と近代日本」『岩波講座日本歴史』第 15 巻、東京：岩波書店
――――（2015）『越境者の政治史：アジア太平洋における日本人の移民と植民』名古屋：名古屋大学出版会
常本照樹（2011）『アイヌ民族と教育政策：新しいアイヌ政策の流れの中で』札幌：札幌大学附属総合研究所
――――（2016）「憲法はアイヌについて何を語っているか：個人の尊重と先住民族」松井茂記編『スターバックスでラテを飲みながら憲法を考える』有斐閣。
戸塚美波子（2003）『金の風に乗って』札幌：札幌テレビ放送株式会社
波平恒男（2014）『近代東アジア史のなかの琉球併合：中華世界秩序から植民地帝国日本へ』岩波書店
ボツマン、ダニエル V.（2009）『血塗られた慈悲、笞打つ帝国：江戸から明治へ、刑罰はいかに権力を変えたのか？』東京：インターシフト
山室信一（2001）『思想課題としてのアジア：基軸・連鎖・投企』東京：岩波書店
與那覇潤（2003）「近代日本における『人種』概念の変容：坪井正五郎の『人類学』との関わりを中心に」『民族学研究』68/1：85-97。
Botsman, Daniel V.（2005）*Punishment and power in the making of modern Japan*. Princeton: Princeton University Press.
Hodes, Martha（2006）Fractions and fictions in the United States census of 1890. In: Stoler, Ann Laura（ed.）*Haunted by empire: Geographies of intimacy in North American history*: 240-270. Durham: Duke University Press.
Lawman, Emma B. and Adam J. Barker（2015）*Settler: Identity and colonialism in 21st century Canada*. Halifax: Fernwood Publishing.
Smith, Len et al.（2011）Fractional identities: The political arithmetic of Aboriginal Victorians. In: Per Axelsson and Peter Sköld（eds.）*Indigenous peoples and demography: The complex relation between identity and statistics*: 15-31. New York: Berghahn.
Mason, Michele M.（2012）*Dominant narratives of colonial Hokkaido and Imperial Japan: envisioning the periphery and the modern nation-state*. Palgrave Macmillan.
Rifkin, Mark（2014）*Settler common sense: Queerness and everyday colonialism in the American renaissance*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
Veracini, Lorenzo（2010）*Settler colonialism: A theoretical overview*. Palgrave Macmillan.
Wolf, Patrick（1999）*Settler colonialism and the transformation of anthropology: The politics and poetics of an ethnographic event*. London: Cassel.
Ziomek, Kirsten L.（2019）*Lost histories: Recovering the lives of Japan's colonial peoples*. Cambridge: Harvard University Asia Center.

（2021 年 9 月 25 日受付）